
執事の日常

ナツメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

執事の日常

【Nコード】

N3351W

【作者名】

ナツメ

【あらすじ】

執事の日常は平凡である。

平凡であるが故に面白いこともある。

が、平凡でないことだってあるかもしれない。
平凡な主人公と何人かの非凡な人たちのお話。

ブローグ

人間というものは、いつの時代も上を見るものだ。

現状に満足しない。

それは美德のようで悪徳にもなる。

社会では現状維持が望まれる仕事も多い。

そのひとつが――執事である。

執事の漫画やドラマが流行したおかげで、執事の知名度は格段にあがった。

それまでは、日本に執事がいることさえ知らなかった者も多いだろう。

だが、執事の日常はあのように華やかなものでも、面白いドラマがあるわけでもない。

そう。ここで声を大にして言うておく。

執事とは――――お母さんだ！――！

「「「いや、お母さんではないでしょ」「」」

三人の声が見事にハモって庭で叫んだ小太郎に降り注ぐ。

声の主たちは呆れながら小太郎に近づく。

「っていうか、さっきからなに叫んでるわけ？いくらご主人様たちがいないにしたって勤務時間中に叫んでいいと思ってるの？」

腕を組んで冷たい目で小太郎を見下ろすのは皐月。

この屋敷最年少の18才。つい四ヶ月前に屋敷にやってきた見習いメイドだ。

だが、高校時代からよく手伝いに来ていたこと、生来の委員長気質、そして何より小太郎よりも背が15センチも高いその体躯のせいで、よく小太郎にぞんざいな口をきく。

まあ、小太郎も皐月のほうが屋敷に関わってる時間は長いし、そのせいで仕事も出来るし、年齢だって2歳下で妹みたいなものだし、なにより身長はこれから追い抜く（と信じてる）から気にもしていない。

「そうです。姿が見えないと思ったらこんなところで油売って。あなたがやらなければいけないことはまだあるのではないですか？」

神経質な喋り方をするのは英登だ。屋敷で働く年少組の中の最年長28歳。

浅黒い肌に190センチ近い身長。引き締まった体はモデルのようだ。

「まあまあ、こーちゃんも朝から働きづめなんだから休憩自体いいじゃん。」

ただ、あんな大声で叫ぶのはよくないねえ。俺っちがいたB棟の方まで聞こえたもん（笑）」

親し気に話しかけてくれるのは陽治。小太郎と同じ年の二十歳である。

「そうだよ。休憩だよ。つーかお前叫んでからここまで走ってきたの？B棟から？」

小太郎が庭の小枝を投げながら陽治に問いかける。

陽治はにへへと笑うと、

「それよりさ、坊っちゃんまが帰ってくるまであと一時間半もないよ？急がないといけないんじゃない？」

腕時計を指差しながら言った。

「えっ？嘘？やっべ。まだ二時間以上あると思ってたのに」

小太郎はそう言うと三人に挨拶もなしにその場を駆け出した。

「なぐにがあと一時間半よ。相変わらず陽には…」

皐月はため息をつく。だが英登はくくつと喉を鳴らしながら笑っている。

「いいんですよ。そもそもあいつは執事に大事な落ち着くつてことを知らなすぎます。」

不用意に叫んだり、挨拶もなしに退座したり、ましてや屋敷内を緊急でもないのに走るのは執事失格です。

今だって陽治に指し示されたとしても自分で確認すれば良かっただけの話です。

そういった基礎中の基礎はここにいる三人全てやると思いますが？」

陽治はニコニコと微笑みながら二人のやり取りを見ている。

「でも、俺っちもこーちゃんの言ってることわかるな」

陽治の発言に二人はなにが？という顔をする。

「執事が地味だって話」。まあ、ご主人様専属ならまだ楽しい日々があんのかもしないけど、

坊っちゃんま付きや、ましてやただのハウスメイドだと家の掃除とかでいっぱいいっぱい一日が終わっちゃうよね」

「確かにそうかもしれませんが、我々はご主人様方に快適に過ごして頂くために雇っ」

「それは分かってるよ。充分。だからさ、俺たちたちも仕事戻ろ？」

英登の言葉を遮り、陽治は伸びをして二人に言った。

三人は来た時と同じようにそれぞれ自分たちの持ち場に戻った。

下の坊っちゃんまが帰ってくるまであと二時間。

それまでに終わらせておかなければいけないものを片付けるために。

始まりの儀式

執事の朝はそんなに早くない。

コックやフットマンと呼ばれる下働きより三十分ほど遅く起きる。一緒に起きることもあるが、コックやフットマンが10時くらいには就寝出来るのと違い、執事は主人が寝てから行う仕事も多いため日付をまたいで寝ることが多い。

若い小太郎がなるべく多く寝てしまつのも無理もないことだ。

小太郎の朝は携帯電話のアラームによって訪れる。

最大音量に設定されているアラームを止め、もぞもぞとベットから這い出る。

洗顔などの一通りの身支度を整え、制服を着ると気持ち切り替わる。

鏡で身だしなみをチェックし、スチュワードの部屋に行く。そこで上級使用人が朝食を取る。

小太郎は一番下の雅樹坊っちゃん（小学三年生）付きの執事。英登は一番上の征四郎坊っちゃん（大学二年生）付きの執事。陽治は真ん中の永斗坊っちゃん（中学三年生）付きの執事。皐月は希美お嬢様付きのメイド。

このご家庭ではなるべく歳が近い使用人をそれぞれの専属執事としている。

だから英登はともかく小太郎や陽治のような若輩者でも執事として

行動している。

屋敷には他にも夫婦で料理を作るコックとその手伝いの人が三人。フットマンと呼ばれる男性下働きが五人。

ハウスメイドと呼ばれる下働きの女性が七人。

執事が英登、陽治、小太郎含め四人。

ハウスキーパーと呼ばれる女性使用人並びに家をまとめる人が一人。スチュワードと呼ばれるご主人様の秘書や資産の管理をする人間が一人いる。

皐月の存在は少し異例で扱い上は執事と同じだが制服はハウスメイドと同じものを着ているし、ハウスメイドの仕事も少ししている。

他にも毎日のように庭師なども来るが、住み込みでは以上の24人となる。

小太郎はスチュワードの部屋の前に来ると一つ深呼吸をする。そして、ノック。

「おはようございます。小太郎です」

一拍置いてはつきりと発音するように気をつける。

寝起きだからといって発音が不明瞭で何をいつてるか分からないと入れてもらえない。

中から机をトントんと叩くような音がかすかに聞こえた。
入室許可の合図だ。

よかったと安堵の息を短く吐いて、

「失礼します」

と言ってから扉を開ける。

入って目の前には応接セット。
それを囲むように壁伝いに本棚があり、たくさんの本が収納されている。

扉を開けて両側に次の部屋へと続く扉がある。

右側が寝室、左側が食事をしたり、使用人で集まる部屋だ。

左側の扉が空いており、数人の声が聞こえる。

主人の部屋と遜色ない絨毯の上を歩いて左側の部屋に入るとスチュワードの大垣とハウスキーパーの阪井がいた。

「おはよう」

大垣が先に挨拶をする。

大垣は老眼鏡から小太郎を上目遣いに見る。

「おはようございます。大垣さん」

小太郎は片手を腹の前に置き、四十五度のお辞儀をする。

「おはようございます。小太郎さん。よく眠れましたか？」

阪井が抑揚のない声で尋ねる。

語調は丁寧だが、顔は笑っておらず目には敵意すら感じる。

「おはようございます。阪井さん。とてもよく眠れました」

大垣と同じように最敬礼で返答する。

今日も一日が始まる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3351w/>

執事の日常

2011年10月10日10時13分発行